

平成 22 年 5 月 30 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19730547

研究課題名（和文） 音楽教育における幼小の連続性を実現する授業モデルの開発

研究課題名（英文） Development of the lesson model which realizes continuity of kindergarten and elementary school in musical education

研究代表者

斉藤 百合子 (SAITO YURIKO)

京都教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：50423223

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、幼児期における音楽表現および小学1年生の音楽授業の方法原理の違いと共通点を導き出すことにより、幼小の連続性を実現する音楽活動の授業モデルを開発することである。理論的および実践的研究の成果を踏まえ、幼小の連続性を実現する音楽活動の授業モデルを提案した。それは以下の通りである。

○幼稚園における音楽活動の提案

ねらい：音や音楽が生み出す質の経験

活動構成の視点：

- ・ 感覚器官を働かせて音や音楽に直接かかわる
- ・ 幼児のつぶやきを意味あるものとしてとらえる
- ・ 保育者は幼児がかかわろうとしている世界を把握する

○小学1年生における音楽活動の提案

ねらい：質の経験を通した音や音楽に対する知覚・感受の力の育成

活動構成の視点：

- ・ 身体活動を使った音や音楽とのかかわりの場を設定
- ・ 音や音楽を伴った対話活動の実現

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this research is to develop the lesson model of the musical activities which realize continuity of kindergarten and elementary school by explaining a difference and common feature of the music expression between infant and the first grader in an elementary school. The lesson model of the musical activities which realize continuity of kindergarten and elementary school based on the result of theoretical and practical research was proposed. It is as follows.

○The proposal of the musical activities in a kindergarten

The Aim: Experience of the quality which sound and music produce

The Viewpoint of musical activity composition:

- 1) Small children experience the quality of sound or music directly by using own sense.
- 2) Childcare persons grasp a small child's murmur as a meaningful thing.
- 3) Childcare persons grasp the world where a small child is trying to be concerned.

○The proposal of the musical activities in the first grader in an elementary school

The Aim: Developing of the power of the perception and the feeling to the sound and music through experience of the quality

The Viewpoint of musical activity composition:

- 1) Children develop of the power of the perception and the feeling to the sound and music by using a body activity.
- 2) Children develop musical experience by the dialog activities.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	400,000	0	400,000
2008年度	300,000	90,000	390,000
2009年度	300,000	90,000	390,000
総計	1,000,000	180,000	1,180,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：音楽教育・幼小連携・授業構成・表現

1. 研究開始当初の背景

国内において「幼小連携」の問題がクローズアップされ始めたきっかけは、平成10年の中教審の答申である。そこには「幼稚園における主体的な遊びを中心とした総合的な指導から小学校への一貫した流れができるよう配慮する必要がある」と書かれている。一方現場においても入学してきた子どもたちが学校教育に馴染めず「小一問題」が起こるなど、現実問題として幼小連携の必要性が高まっている。国内では国の方策および現場の必然性から幼小連携に関する研究が増加している。

幼小連携研究としては、カリキュラム研究や指導方法の開発研究が為されていることが多いが、本研究では、実際に幼稚園での観察、および小学校現場での音楽授業の分析に基づいて、実証的に幼小の連続性の問題を解明していくところに独自性をもつ。また「表現」という分野を軸として、幼小の連続性を解明していくという点においても独自性をもつ。

2. 研究の目的

本研究の目的は、幼児期における音楽表現および小学1年生の音楽授業の方法原理の違いと共通点を導き出すことによって、幼児期の「表現」および低学年期の「音楽科」の授業モデルを開発し、「表現」を軸にした幼小の連続性を実現することである。

本研究では、いわゆる小1問題などの今日的課題を受けて現実問題となりつつある「幼小連携」について、「音楽科」という教科を窓口として、教育方法論的立場から幼稚園教育から小学校教育への滑らかな接続の可能性を探る。ここでいう「滑らかな接続」とは、子どもの経験の発展に着目し、子どもの経験の

発展の自然な筋道に沿って指導方法を開発することによって、幼小の連続性を実現することである。

つまり、幼児期の「表現」はどのようにして教科としての「音楽科」に連続発展していくのか、教育方法論的立場からその連続性を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では上記の研究の目的を実現するために以下の手続きをとる。

(1) 幼小の連続性に関する理論的考察

J. デューイの理論を手がかりとして、音楽的経験における幼小の連続性を実現するプログラムの基礎となる理論的基盤を明らかにする。

(2) 幼小の連続性に関する実践的考察

幼稚園および小学校1年生それぞれを対象にして、同じ内容の実践を実施し、その分析を通して、幼稚園および小学校1年生の音楽経験の認識のちがいと発展性を明らかにする。

(3) 幼小の連続性を実現する授業モデルの開発

以上の研究成果を踏まえ、幼稚園および小学校1年生それぞれの認識の発展に即した音楽活動の授業モデルを開発する。

4. 研究成果

本研究では、幼児期および低学年期における音楽活動を軸にした幼小の連続性を実現するために、幼児期における音楽表現および小学1年生の音楽授業の方法原理の違いと共通

点を明らかにしてきた。以下、理論的考察および実践的考察を通して導き出された結論である。

#### ○幼小の連続性に関する理論的考察

まず、幼小の連続性を実現するための教育方法を導き出すために、以下の二つの見地から理論的考察を行った。まず一点目はデュエイの「遊び」と「作業」の観点から幼小の連続性を実現する構造を明らかにした。二点目は幼稚園から小学校へつなぐ音楽科カリキュラムが明確に示されている、アメリカの音楽科教科書「SBM」を取り上げ、そこにおける幼稚園段階および小学1年生段階のカリキュラムの比較を行った。以上の見地より明らかになった結論を整理した上で、幼小の連続性を実現する教育方法を導き出した。それは以下の通りである。

##### 《幼稚園における教育方法の原理》

ねらいは「遊びに没頭する活動を通して意味そのものの経験すること」である。幼児は遊びを通して世界を知っていく。直接ひとやものに働きかけ、かかわることによって思考の基礎がつくられるのである。次に幼児がかかわる内容は「幼児をとりまく現実的生活」であるべきである。ごく日常的な家庭生活のこと、家族のこと、自然のことなど、幼児を取り囲む世界が経験を進めていく上での対象となる。そしてその方法は「現実世界を経験することのできる遊びに没頭すること」が重要である。幼児が行為を通して世界をつかむ。また保育者としては、幼児が遊びを通してどのような世界とかかわりをもとうとしているのかを把握することが必要となる。それによって環境設定や支援が工夫されることとなる。

##### 《小学校における教育方法の原理》

ねらいは「現実の事物そのものを扱う諸活動を通して経験の意味を拡大すること」である。また経験する内容は「子どもをとりまく生活・社会・自然」であるべきである。そしてその方法は「感覚器官を働かせて直接環境とかかわり、環境からの働きかけを意識すること」が求められる。小学校においても必ず直接ものやひととかかわりそれからの働きかけの結果を意識することによって、経験の意味を拡大していくのである。

#### ○幼小の連続性に関する実践的考察

幼小の連続性を実現するプログラム開発の基盤となる実践的検討を行った。まず、幼児はどのように音素材と出会い、探究活動を行うのか、その原初的な姿を把握するために、幼稚園児を対象として紙の素材を使った音づ

くりの実践および分析を行った。次に、幼稚園児および小学校1年生を対象として、全く同内容の鑑賞プログラムを実施した。同じ内容のプログラムをそれぞれに実施した際の認識のちがいおよび共通点を明らかにした。

##### 《幼児および小学1年生における音楽認識の特徴》

###### \*共通点

音楽の認識過程の枠組みとしては大きな違いは見られなかった。幼児も小学1年生いづれも、まず楽曲のある特徴に気づくところから曲を認識するようになる。次にその特徴以外の他の要素にも気付きはじめる。そして様々な要素を関連づけてストーリーとしてとらえるようになる。そして最終的には楽曲全体が生み出している曲想をとらえるようになる。

###### \*相違点

認識方法やイメージの広がりについては違いがみられた。

まず認識方法として、幼児は必ず動きを通して音楽の特徴を捉え、イメージを深めている。動きを通してAとBの違いを感じ取るようになる。そしてそれらをつぶやきとして表出し、他者と交流することによって、さらに認識が拡大していく。

一方小学1年生は、音楽を聴いた直後の対話を通して音楽の特徴やイメージを言語化することができる。対話の中で「速いところがジャンプしている感じで、途中のゆっくりのところが疲れて休んでいるみたい」と対象がどのようなかたちをもち、そしてそれがどういふ様子を表しているのか、その関連について言葉で伝えることができる。さらにそこに身体活動が加わることによって、イメージが多様化することが明らかとなった。

このように常に動きを介して音や音楽を認識していく幼児に対して、小学1年生は対話によって音や音楽の特徴を認識していくことができるが、さらに自らの感覚器官を働かせて動きを伴わせることによって、より詳細な知覚・感受が行われるということが明らかとなった。

#### ○幼小の連続性を実現する音楽活動モデルの提案

以上、理論的および実践的研究の成果を踏まえ、幼小の連続性を実現する音楽活動の授業モデルを提案した。それは以下の通りである。

##### 《幼稚園における音楽活動の提案》

ねらい：音や音楽が生み出す質の経験

活動構成の視点：

- ・感覚器官を働かせて音や音楽に直接かか

わる

- ・幼児のつぶやきを意味あるものとしてとらえる
- ・保育者は幼児がかかわろうとしている世界を把握する

《小学1年生における音楽活動の提案》

ねらい：質の経験を通じた音や音楽に対する知覚・感受の力の育成

活動構成の視点：

- ・身体活動を使った音や音楽とのかかわりの場を設定
- ・音や音楽を伴った対話活動の実現

○今後の課題

今回はまずは幼児や子どもの音楽認識に着目して、その共通点および違いについて明らかにしてきた。したがってそれらをつなぐカリキュラム構成まではまだ至っていない。しかしながら真に幼小の経験を連続的につないでいくことを実現するならば、そこにどのようなカリキュラムの軸を置けばよいか問題となる。したがって、今後の課題としては、幼小の経験を連続発展させることのできる音楽カリキュラムを構想していくことである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 斉藤百合子 (2010) 「幼児および小学1年生における音楽経験の比較」『学校音楽教育研究』第14巻、85-86頁。
- ② 斉藤百合子 (2009) 「課題研究：音楽科カリキュラムと授業実践の国際比較研究Ⅴ 日本における「批評」の実践 1. 幼稚園の実践」『学校音楽教育研究』第13巻、11頁。
- ③ 斉藤百合子 (2008) 「幼小連携からみた音楽教育の方法原理の比較 -Silver Burdett 「Music」の教科書分析を通して-」『常磐会学園大学研究紀要』第8号、43-57頁。

[学会発表] (計5件)

- ① 斉藤百合子 「幼児および小学1年生における音楽経験の比較」日本学校音楽教育実践学会第14回全国大会(オリンピック記念青少年総合センター)、2009年8月23日。
- ② 斉藤百合子 「課題研究：日本における『批評』の実践 幼稚園の実践」日本学校音楽教育実践学会第13回全国大会(オリンピック記念青少年総合センター)、2008年8月24

日。

- ③ 斉藤百合子 「幼稚園におけるMMCPの実践報告」関西音楽教育実践学研究会(大阪教育大学)、2008年3月8日。
- ④ 斉藤百合子 「幼小連携の立場からみたデュエーイの『遊び』と『作業』」日本デュエーイ学会第51回研究大会(奈良女子大学)、2007年10月20日。
- ⑤ 斉藤百合子 「幼小連携からみた音楽教育の方法原理の比較」日本学校音楽教育実践学会第12回全国大会(くらしき作陽大学)、2007年8月19日。

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

6. 研究組織

(1) 研究代表者

斉藤 百合子 (SAITO YURIKO)  
京都教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号：50423223